

新世界の誘惑

—ユダヤ系アメリカ人にとって「同化」の意味するもの—

新美 澄子

はじめに

アメリカ合衆国という国はその成立の過程からして多元的な国家であった。絶えざる移民の流入をエネルギーとしてダイナミックに発展してきた国である。アメリカ合衆国へ亡命する外国人の数は今後もかなりの数に登るであろう。しかし合衆国から他国へ亡命する人間はおそらく小数であり続けるであろう。それほどアメリカは世界の人々から自由な国、可能性の豊かな国というイメージを持たれてきた。しかし、その結果、多人種、多宗教の国となったために、アメリカには今だに人種間の偏見や差別がしつこく残存している。たとえば反ユダヤ主義は表面的には消滅したように見えるが、実際には日常生活のなかで依然として根強く残っている。かつてはシナゴグの壁に鉤十字をスプレーで落書するといったような露骨な迫害が目についたが、現在でも雇用の際の陰微な差別だとか、マスメディアによるユダヤ陰謀論の喧伝だとか、新しい形の反ユダヤ主義はいかかわらずさまざまな手を使って続いている。中東情勢が緊張するたびに、反イスラエル感情は煽られるし、黒人やその他のマイノリティがユダヤ人にたいして敵意をあらわにする傾向も変わらない。

チャールズ・E・シルバーマン(Charles E. Silberman)の『アメリカのユダヤ人』(*A Certain People*)によれば、現在、アメリカのユダヤ人は黒人やアジア系アメリカ人に追い上げられており、彼らとの間の人種的コンフリクトが目だって増えている。合衆国の黒人層はユダヤ人に格別な憎しみを抱いているが、これはアメリカ特有のユダヤ排斥である¹⁾。

アメリカにおけるユダヤ人の社会的進出は確かに目を見張るほどだが、実はその政治的立場はリベラルから保守まで、まことに多様である。ユダヤ系アメリカ人の中にはユダヤ教と距離をおく者も増加している。イスラエル建国時および1966年の中東危機、いわゆる六日戦争前後には無条件でイスラエルを支持したユダヤ人社会の中からも次第に不協和音が聞こえるようになった²⁾。

ところでさまざまな形態をとってマスメディアが広めているイスラエル(ユダヤ)ロビーの影響力については、実際以上に誇大に喧伝されていることが多い。もともと多人種国家アメリカでは政治の舞台を利用してのさまざまなエスニック・グループによるロビー活動が昔から活発だが、イスラエル(ユダヤ)ロビーもその一つにすぎないのに、なぜかユダヤ系の影響力のみが誇張して伝えられ、ユダヤ陰謀説のような虚像が作り出されている。

わが国日本でも数多くのユダヤ謀略説や反ユダヤ文献が書店の店頭に山積みされている。その大半は虚偽であり、事実を誇張して書いていると思われる。本稿は限られた紙幅ではあるが、現代のユダヤ系アメリカ作家たちの作品を通して、アメリカにおけるユダヤ人社会をいくつかの位相から捉え、ユダヤ人社会が今日、直面する諸問題を考察し、今後の展望を探ってみた。

1. 新天地を求めて

I. B. シンガー (I. B. Singer) の長編『敵—ある愛の物語』(Enemies, A Love Story) の中年の主人公、ハーマン・ブローダーは、戦後の平和なアメリカに住んでいるのに、耳には自分を追いかけてくるナチの叫び声がきこえる。ポーランドのユダヤ人狩りで家族を失った彼は、故郷で異教徒の若い女ヤドヴィーガの家の屋根裏部屋で三年ものあいだ潜伏していたお陰で命拾いした。終戦から三年、生命の恩人であるヤドヴィーガを妻に迎え、ともにアメリカに来て新生活を始めたものの、あるとき彼に突如としてホロコーストの白昼夢が強迫観念のように襲う。ナチが力をもりかえしてニューヨークを占領し、彼は洗面所に隠れ、誰かに食物を運んでもらいながら生き続けるという妄想である。ユダヤ人の住む界わいを歩いているときですらも、ハーマンはナチがきたとき隠れる場所を無意識のうちに探すのだった。アメリカに移住したユダヤ人のすべてがハーマンのような神経症にかかっていたわけではない。むしろニューヨークの大多数のユダヤ人はのびのびと生きていた。市内にはヘブライ語の学校が堂々と看板をかけている。(そんなことはヨーロッパでは考えられなかった。) 人々はおおびらにイーディッシュ語の新聞を読むこともできた。ここでは誰からも姿を隠す必要はないのだ。それは奇跡のように思える。「いつまでこれが続くのだろうか」と彼は独りごちる。「ナチはどこにいるの? ナチのいないこの国はいったいどんな世界なのかしら?」⁴⁾と彼の愛人マーシャは尋ねる。

アメリカ史をざっと遡ってみると、いわゆるギルデッド(金箔)時代(南北戦争直後の1865年から90年頃までの米国の好況時代)以来、ユダヤ人はアメリカ社会に融けこむことに自信を持ち始めてきた⁵⁾。ハーマンはアメリカで生きられること、ナチやソビエトの秘密警察や国境警備隊や告発者の恐怖なしに生きられることがいかに素晴らしいことかを、繰りかえし自分にいいきかせる。ここでは身分証明書さえも持っていないといい。アメリカでは誰も書類を見せろなどとはいわない。ユダヤ系移民にとってアメリカ合衆国は彼らが母国と呼びうる唯一の場所であり、だからヨーロッパにいるユダヤ人はみんなアメリカに来たがった。東ヨーロッパからきたユダヤ人で故郷へ帰る者はほとんどいなかったという。

アメリカのユダヤ人は、かつて離散したユダヤ人が生きたどの社会よりも自由な社会に生きている。これは多くのユダヤ人が認めているところだ。アメリカ合衆国という国は、反ユダヤ主義を政府や教会の政策にしたことが一度もなかった。ヨーロッパにいた頃は、ユダヤ人たちはキリスト教が支配する社会に仲間入りするために、心ならずもキリスト教に改宗し、洗礼まで受けた。ところがアメリカでは、背教が重大な社会的関心事になったためしかなかった。キリスト教の洗礼を受けなくとも、ユダヤ人はアメリカ社会に溶けこむことができたのである。洗礼という踏み絵を不要にさせたアメリカ社会の開放性がユダヤ人の同化を容易にした。しかし、だからといって、ヨーロッパでユダヤ人たちが経験したような迫害がアメリカに移住したのちに直ちに消え去ったわけではなかった。ごく少数の幸運なユダヤ人の成功例が誇張して喧伝され、さまざまな誤解を生み、ユダヤ人は誰でも金もうけがうまく、欲が深いという評判を生みだした。現実には多くのユダヤ人たちがニューヨークのロウアー・イーストサイドのユダヤ人街で貧困に喘いでいたにもかかわらず、その種

の誤解が反ユダヤ主義の温床になることも少なくなかった。その結果、新たに移民してきたユダヤ人たちは、アメリカに入植したあとも、できるだけユダヤ人としてのアイデンティティを隠すようになった。出身を偽り、あきらかにユダヤ人とわかる名前をキリスト教徒の名前らしく変える者が続出した。ユダヤ人であることを理由に就職を拒否されたり、アパートの賃貸やホテルの宿泊を断られたりすることが日常的に起きていたからである。大学など高等教育機関がユダヤ人にたいして門戸を閉ざすというような事態も珍しくはなかった。こうして小数の成功例の陰で、現実には多くのユダヤ移民たちがアメリカに移住したあとも差別に悩まされ、偏見と憎悪に耐えねばならなかったのである⁶⁾。

2. ユダヤ教の問題

フィリップ・ロス(Philip Roth)の長編『ポートノイの不満』(*Portnoy's Complaint*)⁷⁾の主人公アレックスが住んでいるビルの正面に、ある日誰かが鉤十字のマークを絵具で書きなぐった。その鉤十字を見るたびに、アレックスは自分が世界の嫌われ者であり、大戦中に六百万人が虐殺された民族の一員で、今もその印を顔の正面につけて異教徒たちに囲まれながら生存していることを意識するのだった。自由と迫害という矛盾する現象がどちらも真実であるところが、光と陰の複雑に交錯する多元的国家アメリカの現実なのである。

ヨーロッパに入植した非ユダヤ系の移民集団の多くは、移住した先の異国の文化を受け入れ、それに適応する努力を惜しまなかった。ところがユダヤ人だけは、何世紀ものあいだ他国の文化を受け入れることを拒否し続けてきた。頑固なユダヤ人が自らのやりかたをいつまでも捨てようとしなかったため、周囲の民族はユダヤ人たちをうさんくさい目で眺め、ついには同化不可能な異人種であると烙印を捺すに至った。その結果、ユダヤ人はさまざまな職業の分野から締めだされ、ひと握りの特定な仕事(金融業)や産業に集中することになったのである。

ユダヤ人たちの目立つ特徴は、自らを、世界をあがなうために神が選んだ「聖なる民」とみなしていたことである。彼らは迫害を受けつつも、非ユダヤ教徒の迫害者にたいして優越感を抱き、彼らと離れて暮らすことに満足していた。しかしゲットーの壁がとり払われ、近代ヨーロッパの文化的潮流がユダヤ人たちの閉塞的な社会に流れ込んでくるに及んで、異文化の激しいエネルギーのうねりは、多くのユダヤ人の先祖伝来の信仰をゆるがせた。ゲットーの壁が取り壊され、ユダヤ人のほうでもヨーロッパの大都会に進出し始めたとき、西欧の文化はほとんどあらゆる点でユダヤ文化よりも優れているようにユダヤ人の目には映った。そのため彼らの多くは勇気を失い、自己嫌悪に陥った⁸⁾。西歐式の生活は著しく進歩しているような気がして、ユダヤ人は他の民族よりも劣った民族だという根の深いコンプレックスを植えつけた。そうこうするうちに「選ばれた民」という観念が摩擦のもとであることに気がついた彼らは、「家ではユダヤ人、街では人になれ」の標語をモットーに、家を一步出れば「郷に入れば郷に従え」の方針通りに西欧の様式に順応しようとした。同化に熱心なユダヤ人にたいしてアメリカ社会は一般的には寛容だったといえる。開放的なアメリカ社会の長所ともいえるが、隣人社会に溶けこもうとするユダヤ人たちを、白人のプロテスタントた

ちはヨーロッパのキリスト教徒たちほど軽蔑したり排斥しようとはしなかった。もともとアメリカ人は伝統的に、民族的な相違よりも宗教上の相違には寛容になる傾向があった。

しかし、ユダヤ人たちは、ヨーロッパからアメリカに移住したあとも、目立ち過ぎると反ユダヤ主義に通じるという昔からの不安を捨てきれなかった。反ユダヤ主義に対抗する唯一の道は、宗教、習慣、その他、彼らを他人種からきわだたせるものの一切を放棄し、群衆のなかにまぎれこむ以外にないとますます信じるに至った。文芸評論家のノーマン・ポドホレッツ(Norman Podhoretz)はその自伝的評論 *Making It* のなかで、「世界で一番長い旅の一つはブルックリンからマンハッタンへの旅だ。現在の自分になるためにどれほど変わらなければならなかったか。そこにはある種の裏切りがあった。」と書いている⁹⁾。

ユダヤ人は異教徒の支配するヨーロッパ社会のなかで安全に生きるために、それなりの处世術を身につけていた。同化するために隣人を執念といえるほどの注意深さで研究したのである。隣人の言語や習慣を徹底的に分析、解釈した。アメリカの一部になるためには、からみつくユダヤ的なしからみからできるだけ自由になるべきだと考えた若い世代のなかには、古い価値観を後生大事に守り続ける両親から離反する者も出てきた。

その典型的なケースを『ポートノイの不满』の主人公、アレックスに見ることができる。正統的なユダヤ人に息子を仕立てようと躍起になる両親に彼は徹底して反抗を試みる。両親ともアレックスを心から愛しているのだが、母親の溺愛ぶりは度が過ぎ、病的なほどである。息子アレックスの書いたものがニューヨーク・タイムズに載るたびに、新聞の切り抜きのコピーを親戚じゅうに送りつける。そのたびにアレックスは当惑し、「お母さん、ぼくはもう三十三ですよ!」と文句をいう。が、「まだお前は私たちにとっては赤ん坊なんだよ」と取りあわない。いつも、肉は特殊な調理法によって清められたものしか食べてはならない。肉と乳製品とを同じ食器で食べてはならない。豚、海老といった泥の中を這う生き物を口にしてはならない等々、食事に関する複雑なユダヤ教の戒律を守るように忠告するのでうさくてかなわない。家の中はつねに清潔に保ち、家族たちにはいつも温かい食事を用意するのがユダヤ人の母親の役目であると信じきっていて、可愛いアレックスがあらゆる細菌から遠ざかるように、外で「コーシャ kosher でない(宗教的規範に合わない不潔な)」食品を食べないように、そして異教徒の娘と親しくならないようにいつも気を配っている。「あんまり出歩いてほしくないわね。ハンバーグやマヨネーズなんか口にすれば駄目よ。細切れのレバーや鮪も駄目。わたしみたいに子供がだめにならないように気をつけている母親なんてそうはいないわよ」¹⁰⁾ アレックスの意識に侵入し、支配しようと考えているのは母親ばかりではない。彼の父親もわが子の宗教教育の熱意にかけては人後に落ちない。ユダヤ教寺院(シナゴグ)へ行くのはいやだとアレックスが文句をいうと、父親はシナゴグの中に居さえすればいいという。「パーミツバ¹¹⁾のお祝いを済ませたからって、それで宗教的な教育が全部終わったわけではないんだぞ。ユダヤの宗教においては生涯学び続けなきゃいかんだ」そう説得する父にアレックスは、「もうユダヤ人のいい子でいるのはたくさんだ! ぼくはもう神様もユダヤ教も信じていない。ジュウに生まれたのは幸運ではなかった。あれはゴイ(goy 非ユダヤ教徒)だとか、これはゴイだとかいうのはもう飽きあきた! いつだって悪いのはゴイで、いいのはジュウなんだから! いちばん最初に

両親からぼくが教わったことは、夜と昼、熱いと冷たいなんかじゃなくって、ゴイかユダヤ人かってことだった。だけどぼくの両親、ぼくの親戚、ぼくのバーミツバのお祝いのために集まってきた友人たちを見ていると、みんな外観ばかり気にしている心の狭い見栄っぱりばかり! (中略) ぼくはユダヤ人の心の狭さを憎んでいる!」¹²⁾

『ポートノイの不満』は、こうした主人公のユダヤ人に対する内部告発に満ちている。二千年にわたってつづいた民族の戒律に縛られ、また専制的な母親におびやかされ、ユダヤ教の戒律を犯した罪の意識のために、ついには不能におちいるアレックスの独白が続く。頭のいいアレックスは父母の期待に応え「いい子」になるために精いっぱい努力を惜しまないが、自由を束縛する父母の悪影響は彼を神経質な人間にし、ついにはノイローゼへと追い込んでいく。主人公の状況はこのうえもなく深刻なはずなのだが、アレックスは苦しみ続ける自己を嘲笑うかのようにユーモラスに語ってみせる。彼の反抗的な態度から明らかなように、若い世代にとって、戒律によって禁じられている異教徒の娘(あるいは息子)との結婚は、父母やユダヤ人社会からの独立を意味しており、ユダヤ人が抱く白人異教徒たちへの根深い偏見や差別を克服することでもあった。

3. 世俗的成功と挫折

I. B. シンガー (Isaac Bashevis Singer) の『敵——ある愛の物語』(*Enemies, A Love Story*) の主人公ハーマンは、いわゆるゴーストライターである。知人のラビのために説教の原稿を代筆することによって生計を立てている。ラビは世俗的にはかなり成功していて、ハーマンのようなゴーストライターを常時雇っては出版や講演を行い、不動産の売買でも手広く儲けているという、きわめて世俗的な聖職者である。キャデラックでユダヤ人の貧民街を乗りまわすことに格別の喜びを感じるような俗物で、ハーマンは生活のためとはいえ、信じてもない神について原稿を書く後ろ暗さは感じているのだが、読者もまたいいかげんな民衆だということに気がついている。ハーマンに言わせれば、現在のユダヤ主義にはただ一つの目的しかない。つまり異教徒の真似をすること、すなわちひたすら、キリスト教徒たちの国家であるアメリカ社会に同化するために異民族結婚をし、ユダヤの伝統や文化を放棄することである。

ユダヤ系アメリカ作家の小説には、このラビほどインチキではないにしても、現世の知恵を生かして経済的に成功し、社会にのし上がったユダヤ人実業家がたくさん出てくる。ソール・ベロー (Saul Bellow) ¹³⁾ の『フンボルトの贈り物』(*Humboldt's Gift*) 中のフンボルトという人物は、「成功」というテーマを情熱的に生きぬき、「失敗者」として人生を終えた詩人である。彼の弟子で、小説の主人公でもある劇作家のシトリンは、書いた戯曲が大ヒットして一躍ほんものの名士になる。大金がころげこみ、ときには政治家と一緒にパレードをするほどの売れっ子作家になった。この二人の男たちはどちらも、一生を文学に賭けた身でありながら、一方は大成功し、他方は極貧のなかに孤独の半生を送るという筋書きで、同じユダヤ人どうしでありながら、彼らの境遇には雲泥の差がある。富むにしても貧苦にあえぐにしても、ユダヤ人の場合は両者の格差がきわだって大きいように思える。成功した世界的な大富豪がいる一方で、生涯、貧困にあえぐ庶民たちの姿も

文学作品にはしばしば登場する。貧しいユダヤ人のなかには、何をしても不運のつきまとう「シュレミール schlemiel」的人物もあり、小説や戯曲に好んで取り上げられている。マラマッド (Bernard Malamud) の長編小説、『アシスタント』(The Assistant)¹⁴⁾ の食料品商モリスと酒屋のカープの場合でいうなら、モリスのほうがシュレミールである。道端で大金を拾う幸運が舞いこんだ次ぎの瞬間には、札束は彼の手を離れているといったモリスにたいして、カープのほうは万事、順風満帆で、手に触れる物すべてが純金に変わる幸運児である。

ユダヤ系アメリカ人のなかには、ハーマン・ブローダーのような不敬虔なユダヤ人がいる一方で、かたくなに古い伝統を守り続ける頑固一徹なユダヤ教徒もいる。ハーマンの愛人の母親は敬虔な正統派ユダヤ教徒で、ユダヤ教の儀式通りのものを食べ、ロウソクをともし、一日に三度祈り、喪服のような地味な服を着て、心のなかではいつもガス室で殺された仲間たちと一緒に生きている。しかし、ハーマンは神を信ずる気には少しもなれない。ユダヤ教会堂にも行かないし、祈とう用の肩かけもつけない。だから近所のユダヤ人たちは彼を心のなかで非難し、仲間外れにする。一方、ポーランドから連れてきた妻のヤドヴィーガのほうは、異教徒出身のくせに、愛する夫と同じ民族・宗教を共有したが、彼女の気持ちを察した近所のユダヤ人たちは、アメリカ生活のなかで希薄になりかけているユダヤ式のやりかたを彼女に教えようとする。

ユダヤ教の宗教習慣の遵守は、宗教的というよりはるかに民族的・文化的な衝動から生まれたものである。移民したユダヤ人はアメリカ社会に完全に溶けこむことを何よりも願っていたが、その願望がある程度成就された時、はじめて、自分たちがどんなにユダヤ人でもあり続けたいと願っているのかを知った。ユダヤ人の多くの親の願いは、ラビたちの宗教教育をあてにして、子供たちがユダヤ教をきちんと身につけることである。わが子が確実にユダヤ人であることを意識し、将来は他のユダヤ人と結婚し、ユダヤ民族が絶えることのないようにすることである。その実現のためにも、ラビの宗教教育はなくてはならぬものなのだが、その際、両親が願うことは、子供たちがユダヤ人過ぎぬようにということであった¹⁵⁾。親たちの望みは、子供たちが宗教的にユダヤ教徒になることではなく、民族としてのユダヤ人になることである。宗教習慣を守りすぎて偏狭になるのは大いに困るが、かといって宗教行事に何一つ関心を払わないのでは心もとない。親は、何にもまして、子供が他のユダヤ人と結婚することを強く望んでおり、古い世代ほど、ユダヤ人存続にとって脅威であるからという理由で、異教徒との結婚に反対する傾向が強い。

4. 消えぬ民族意識——契約の民ということ——

『ポートノイの不満』のアレックスは、ユダヤ人らしさを押しつける両親には反抗しているものの、あるとき、ひょんなことから自分のルーツへのこだわりに気づいて愕然とする。二十歳のとき、異教徒のガールフレンドができたが、彼女が口をすべらしたほんの一言がきっかけでその恋は破局になる。ある日アレックスが「きみは(結婚のためにユダヤ教へ)改宗する気はある?」と何気なく質問してみたところ、彼女のほうは無邪気な顔で「そんな気持ちになれるものかしらねえ?」と答え、この答えがアレックスをひどく怒らせる。無神論者を自認し、日ごろは身内のユダヤ人的狭量さに心底

あいそをつかしていたはずなのに、いざとなるとユダヤ人としてのアイデンティティにこだわるアレックスであった。その後も、生えぬきのプロテスタントのエリート女性に恋をしかけておきながら、最後にはきまって自分のほうから身を引いてしまうという、自分でもわけのわからない行動パターンを繰り返す。恋愛に挫折するたびに、アレックスは、アメリカ合衆国の建国の父たち(ピルグリム・ファーザーズ)にたいする一片の愛情も自分のなかにはないことを確認するのだった。ユダヤ教に関心がないばかりか拒否さえする一方で、自分をユダヤ人と呼び続けたがる(アレックスに見られるような)矛盾した感情こそは、ユダヤ人に特有なアンビバレント^{アンビバレント}の心理ではないだろうか。現在、大半のユダヤ人たちは、両親や祖父母のやり方とは異なっている、何らかの形でユダヤ人として留まることを望んでいるといわれている。

『敵——ある愛の物語』のハーマンも、アレックスと同じような自己矛盾に陥っている。ハーマンは偽善的な原稿で身を立て、世間をあざむく一方で、妻の目を盗んで愛人を作るといった、救いようのないほど頹廢的な刹那主義者だが、それでもあるとき、突然、それまでの生き方をすっかり改めて、良きユダヤ人になろうと決意する。彼もアレックス同様に、「伝統を守る良きユダヤ人」対「伝統を守らない悪いユダヤ人」という倫理的規範に縛られている。ハーマンは虚偽の生活をやめて聖書やユダヤ教典に帰ろうと決意したあとで、自分の心境の変化をこう弁解する。「すべての人間が他の人間を平然と殺戮する可能性がある以上、誰でもナチになりうるのだ。ナチにならなかったらユダヤ人である以外にない」¹⁶⁾

『アシスタント』のヒロイン、モリスの一人娘ヘレン・ボーバーは、ユダヤ人として厳格に育てられたわけではないが、それでもユダヤ民族に対しては忠実な気持ちでいる。ユダヤ民族がくぐってきた苦しみを尊ぶからであり、ユダヤ民族を人間として愛し、自分が彼らの一員であることを誇りにしている。イタリア系の青年フランク・アルパインに出会うまでは、自分が異なる民族の男と結婚することになるとは一度も考えたことがなかった。一方、ヘレンを慕うフランクにとって、ユダヤ人とは、時折モリスの店を訪れる貧しいユダヤ人たちから受けた印象では、まったくもってケツタイな民族だった。なぜなら彼らは飢えに苦しんでいるくせに自分たちがなぜ「選民」であるのかを考え続けているからである。ユダヤ人たちは周囲の反ユダヤ主義の影響で自己憎悪に陥る傾向があり、それにたいする効果的な防壁としても、自らの選民意識に執着するようになったといわれている¹⁷⁾。『ポートノイの不満』のアレックスは告白している。「アメリカ・ユダヤ人が受け継ぐものは言語でも体系でも学問でも神ですらなく、ある心理構造、ユダヤ人は他の民族より優れているという優越感である」¹⁸⁾。

物語の精神的支柱ともいべき人物である『アシスタント』の食料品商モリス・ボーバーは、ユダヤ人としてロシアに育ち、徴兵されたが脱走して、苦労を重ねたあげく、アメリカに移住した。正直で頑固な性情のゆえに商売はうまくいかず、ニューヨークの下町で貧しい食料品商として人生を終わろうとしている。あるとき、店員のフランクが主人のモリスに、「ユダヤ人とはいったいどんなものか」と質問すると、モリスはユダヤ人にとって大切なのが「トウラ torah (ユダヤ教の教典)」であると教える。「これは律法のことだ。ユダヤ人は律法を守らねばならんのだよ」¹⁹⁾。ところがそう語るモリス自身は、シナゴグへはめったに行かないし、ユダヤ教では禁じられているハムを売り、安息日にも

店を開けている。このことを指摘されるとモリスは「食べるためには休日にも店を開けなければならない」と言い訳する。食事に関する律法は旧式であり、守らなくてもさしつかえないのだ。大切なのは正直で善良であること、それ以上の律法はない。このモリスの倫理観は、他の宗教が重視する一般的な倫理観と何ら変わるところがない。マラマッドが、ユダヤ教というよりはキリスト教世界に近いと言われるのは、このように普遍的で開かれた宗教観に立っているからであろう。しかし宗教としてはそうであっても、民族としてのユダヤ人のアイデンティティには、モリスのなかにも、やはり強いこだわりが見られる。物語の結末ではフランクとヘレンの結婚が暗示され、フランクのカトリックのキリスト教思想と、モリス的ユダヤ思想の融合が成就しそうな予感を残して幕となる。

ユダヤ教の自己定義によれば、ユダヤ人として生まれたものはたとえキリスト教に改宗したとしても、ユダヤ教徒としてとどまる。これはキリスト教徒には理解しがたい点である。ユダヤ教は自らを規定するにあたって、自発的な信仰者の共同体ではなく、非自発的な運命共同体とみなしている。ユダヤ教の中心をなす神話によれば、彼らは契約によって選ばれているのだ。したがって、ユダヤ教への改宗は宗教的に自らをコミットするのみならず、ユダヤ民族にも同化することを意味している。個人は信条や慣習の違いによってではなく、生まれてくることによってユダヤ人となるのである。ユダヤ人は孤立を強いられれば強いられるほど、迫害の手を休めない外部のキリスト教徒と彼らの差異を強調するはめになった。そうすることで初めて、自らの苦悩を理解し耐えることができたのである。

5. 六日戦争と今後の展望

1966年から続いていたアラブ・イスラエル間の緊張は、67年5月にはイスラエル建国以来最大の危機を迎えた。この時期の中東情勢を欧米諸国が正確に認識していなかったため、イスラエルは期待していたような共感を先進諸国から得られずに孤立していた。時間が経つにつれてイスラエルの孤立感は深まった。それはナチス・ドイツ時代にヨーロッパのユダヤ人が経験したことの再現と思われたほどの危機であった。窮地に立たされたイスラエルは6月4日朝、突然、アラブ諸国にたいして先制攻撃に出た。戦争は六日間であっけなくイスラエルの勝利に終わった。

六日戦争と、それに先立つイスラエルが破滅に瀕しているかに見えた四週間こそは、アメリカだけでなくあらゆる土地のユダヤ人にとって記憶すべき試練の一个月であった。第二次大戦の時、アメリカ合衆国に在住していたユダヤ人たちは、40年代のナチスによるホロコーストに、さして注意をはらってこなかった。大半は自分自身の生活に忙しく、遠いヨーロッパにいる同胞の苦しみに無頓着だったのである。66年の六日戦争が始まるまで、アメリカのユダヤ人はイスラエルを自らのアイデンティティの一部とは考えておらず、むしろ慈善の対象とみなしていたから、イスラエルの運命に一喜一憂する自分たちの心理的变化に驚いた。今日では、アメリカ合衆国の七割以上のユダヤ人がイスラエルに関心を持っている。「イスラエルが消滅することは自分の人生にとって大きな喪失と感じるだろう」と大多数のユダヤ人は答えている。六日戦争はアメリカにいるユダヤ人にとっても、二つの時代を画する分岐点となった²⁰⁾。

しかし、今日アメリカのユダヤ人社会はけして熱烈なイスラエル支持で一枚岩となっているわけではない。イスラエルの政治的態度をつねに無条件に支持する右派は、在米ユダヤ人の一部にすぎない。イスラエルにたいする強い祖国愛を抱きながらも、その政府の強硬な政策に批判的なユダヤ系アメリカ人のほうがかなりの数に上る。とくにイスラエルのパレスチナ占領と、それに伴う占領地でのユダヤ人兵士たちによる難民たちへの残虐な行為が報道されるにつれて、この占領自体を疑問視するユダヤ人たちさえ現れた。彼らは、占領政策を終息させるどころか、逆に占領地の範囲を拡張しようとするイスラエル政府を、政治的にも経済的にも支援し続けるアメリカ政府の態度に苛立ち、当惑している。なかにはユダヤ人でありながらパレスチナ難民に救援活動を行う団体に積極的に身を投ずる者も出てきた²¹⁾。ユダヤ系アメリカ人のなかから公にイスラエルの政策に反対の声が聞かれるようになったのは、1982年のレバノン侵略以降のことである。

一方では、ユダヤ人は別の悩みも抱えている。ユダヤ教を熱心に信奉しているユダヤ人や民族意識の強い人々にとって、今日もっとも恐れなくてはならないのは迫害ではなくて、むしろ合衆国を初めとする先進諸国の文化的な誘惑である²²⁾。ユダヤ人はアメリカが多元主義国家へ変化したことを高く評価しながらも、開かれた社会の甘い誘いには極度に敏感になっているのだ。建国の当初からして存在した宗教的文化的多元主義のために、ヨーロッパでは見られない寛容と自由を許してきたアメリカは、建国の昔から一元的な価値観を貫きにくいところがあった。もともとキリスト教にとって、民族と宗教の関係は本質的なものではない。宗教と民族のつながりはキリスト教徒にとっては本質的というよりは偶然的なものである。ところが、ユダヤ人たちはこれまで宗教を民族から区別したことがなかった。ユダヤ人の親から生まれた人間は、ユダヤ教を信じようと信じまいとユダヤ人にとどまるのである。しかしそれは、アメリカのように文化的同化が容易な国では、皮肉にも彼らの民族宗教であるユダヤ教をきわめてもろく傷つきやすいものになっている。正統的ユダヤ教徒にとって一番、恐ろしいのは、子供たちが異教徒との結婚を願うことである。異文化との融合はやがてユダヤ人であることのアイデンティティを希薄にし、ユダヤ人であることへの執着を弱める。ユダヤ人であることへの執着を弱めるものは、どんなものであれ、ユダヤ教の存続にとっては脅威である。

アメリカのユダヤ教の聖職者たちは、宗教を多元的にとらえることで教義に背くのではないかと恐れる一方で、新しいユダヤ教神学の必要を感じ、ことに若い世代の心を捕えるために、民族性の強い宗教よりも、個人の要求に応えるユダヤ教を摸索している²³⁾。つまり、より個人主義的で、従来ほど信仰の共同体を強調しないような考え方である。しかし、個人重視は、ユダヤ教が偶像崇拜の一形態として批判しているナルシズムに傾かせる危険がある。ユダヤ教が今後負わなければならない課題は多いのだ。

たしかにシルバーマンの指摘するように、ユダヤ人は心のどこかで一つの民族としての結束を維持するために、ホロコーストや迫害に頼ってきたといえる。ユダヤ人たちは、開かれた社会の甘い誘いに抗うためにも、ホロコーストを記憶し続ける必要があった。ナチスの人種主義政策は、すべてのユダヤ人に向けられた。キリスト教徒に改宗しようが同化しようが、ナチスの目から見れば、その人間が「血統的に」ユダヤ人であることに何の変わりもなかった。将来、ナチズムのような集団

ヒステリー状況が再度起きないと誰が断言できるだろうか。ナチズムは、ユダヤ人の民族意識を目覚めさせることになった。その意識が戦後、イスラエル建国の大きなエネルギーとなったことは否定できない。だから今日でも多くのユダヤ人たちは、反ユダヤ主義の台頭は、ユダヤ人としての意識を逆に強化することになるだろうと考えている。

特殊な歴史を生きてきたユダヤ系アメリカ人の未来はいかなる展望を持ちうるのか。第二次大戦後はアメリカは真に多民族、多宗教、そしてしだいに多人種の国家になった。ユダヤ系アメリカ人にとって今日なお切実な問題は、昔も今も本質的にはあまり変わっていないように思える。つまり、はっきりした民族集団に属することと、より大きな共同体への忠誠とがはたして両立しうるか否かという問いであると思われる。

注

- 1) Charls E. Silberman, *A Certain People*, Summit Books, 1985.
チャールズ・シルバーマン『アメリカのユダヤ人——ある民族の肖像』サイマル出版会 1988 p.339.
- 2) 土井敏邦『アメリカのユダヤ人』岩波書店 1991 p.6.
- 3) Isaac Bashevis Singer, *Enemies, A Love Stories*, Farrar, Straus, Giroux, 1972.
- 4) Ibid., p.110.
- 5) Silberman, p.45.
- 6) 丸山直起『アメリカのユダヤ人』ジャパンタイムズ 1990 p.60.
- 7) Philip Roth, *Portnoy's Complaint*, Random House, 1967.
- 8) Silberman, p.162.
- 9) Ibid., p.61.
- 10) *Portnoy's Complaint* p.34.
- 11) Bar mitzvah のこと。ユダヤ人の少年は十三歳になると宗教的には責任を負う人間と見なされる。
Ibid., p.62.
- 12) Ibid., p.75-76.
- 13) Saul Bellow, *Humbolt's Gift*, The Viking Press, 1973.
- 14) Bernard Malamud, *The Assistant*, Farrar, Straus and Giroux, 1957.
- 15) Silberman, p.180.
- 16) *Enemies, A Love Story*, p.171.
- 17) Howard M. Sachar, *A History of the Jews in America*, Vintage Books, 1993, p.415.
- 18) *Portnoy's Complaint*, p.76.
- 19) *The Assistant*, p.124.
- 20) Silberman, p.199.
- 21) 『アメリカのユダヤ人』 p.86.
- 22) Silberman, p.165.
- 23) Ibid., p.273.